

外国語

帯活動とオンライン交流授業を組み込んだ「話すこと [やり取り]」の技能を高めるための授業モデルの開発と評価 -英語科教員誰もが取り組める実践を目指して-

市原市立国分寺台中学校教諭 みずま けんた 水間 健太

遠隔地にいる生徒同士が英語で交流する活動を通して「話すこと [やり取り]」の技能を高めるため、市原市内の中学校2校の2年生を対象に帯活動とオンライン交流授業を行った。やり取りする際のテーマを「自分の将来の夢とその実現に向けてしていること」という教科書に掲載されているものを選ぶ等、教員が取り組みやすい実践を目指した。その結果、段階を踏んだ帯活動と生徒が互いに自分の考えや気持ちを伝え合う活動の工夫により、話すことの技能が向上し協働的な学びが促進された。また、教員の参考になるような授業モデルの開発および評価方法の提案を行うことができた。今後は、実践をより良くしていくとともに、市や県、全国へと成果を発信していきたい。

道徳

生徒が「生き方の問い」を生む道徳科授業の研究 -問いⅠ・問いⅡづくりによる生き方の探求を通して-

柏市立大津ケ丘中学校教諭 はしもと まいか 橋本 舞佳

「人間としての生き方についての考えを深める」という学習活動を授業でどのように実現するかが自身の課題であった。そこで、教材の人物の生き方に対し生徒が問い（問いⅠ）をつくり、その探求を通して生徒が自分に問う「生き方の問い（問いⅡ）」を生む道徳科授業の在り方を研究した。理論研究と調査研究から、生徒の問いの質の向上を図り、問いⅠを探求する過程で対称軸の思考や生き方を支える価値観を明確にする問いを補う工夫が必要であることを明らかにした。中学2年生を対象に検証した結果、多くの生徒が問いⅡを生成でき、問いⅠの探求という協働の学びの充実にもつながり、生き方に対する探求心を高めることが分かった。生徒の問いづくりに関心をもつ先生方に活用していただきたい。

現代的教育課題

地域との協働学習による児童の情報活用能力の育成 -1人1台端末を活用したGoogleサイトを用いたウェブサイト制作を通して-

柏市立大津ケ丘第一小学校教諭 こばやし ふみかず 小林 郁和

情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力として位置付けられており、その育成のために問題解決・探究における積極的な実践が求められている。本研究では、第5学年の総合的な学習の時間に、1人1台端末とGoogleサイトを利用したウェブサイト制作による地域との協働学習を展開し、情報活用能力の向上を図った。児童は「地域の交流を促進するウェブサイトの制作」という課題を設定し、商店街、公共施設、農家と協働しながら学習を進めた。活動はオンラインにとどまらず、「商店街での農作物販売」「公共施設での研究発表」などの直接的な交流も促進した。社会と連携したウェブサイトによる情報発信によって情報活用能力が向上した一例として、参考にしていただければ幸いである。

知的障害

自己有用感を高めるための指導・支援に関する研究

-総合的な探究の時間（地域学校協働活動）を通して-

県立飯高特別支援学校教諭 ^{えざわ}江澤 ^{かな}加奈

他者から称賛を受けた時に肯定的に捉えることが難しい生徒がいる状況があった。自分の良い面に気付き、知ることによって地域や社会で活かそうとする生徒が増えてほしいと考え、本主題を設定した。高等部生徒を対象に、総合的な探究の時間（地域学校協働活動）で、「地域のために自分たちにできることを考える」ことを目標に実践を行った。生徒の発案を基に授業を構成したことで主体的に活動する姿が見られた。グループ活動で役割を果たし、他者（教員、友達、地域の方）と関わりながら、多くの称賛を得たことで生徒の自己有用感が高まる結果が示された。今後も、学校全体で地域学校協働活動を充実させ、自己有用感が高まる指導・支援の検討を続けていきたい。

特別支援教育課題

保護者の援助要請を導く支援スキルの在り方について

-保護者の援助要請行動が変容するプロセスに着目して-

県立君津特別支援学校（前安房特別支援学校館山巖分校）教諭 ^{すずき}鈴木 ^{まき}真紀

保護者が他者に援助要請する力を獲得することは、将来に渡る有効な養育力につながる。そこで、保護者の援助要請を導く教員の支援スキルの在り方を明らかにしたいと考えた。本研究では、幼稚部での取組について保護者の援助要請行動が変容するプロセスに焦点を当て分析した。その結果、子供、保護者、教員の関係性に合わせた支援があることで6つの時期区分を経て変容していくことが明らかとなった。そのことを踏まえ、教員の支援を標準化するために、関係性をアセスメントするシートや支援の視点を導く確認リストの作成を行った。今後は、各研修会等で研修ツールの活用を行い、有効性を検証しながら改善していくとともに障害の有無や年齢に問わず活用できる方法を探っていきたい。

特別支援教育課題

1人1台端末を活用した自立活動の指導の充実

-指導者及び生徒が活用可能なツールの検討-

柏市立中原中学校（前風早中学校）教諭 ^{ふるかわ}古川 ^{さちお}幸夫

特別支援学級における自立活動の指導の充実のために、1人1台端末の活用の推進を目指し、生徒の自己理解を深めるための「自分発見ツール」を作成・活用し、実践を行った。その結果、生徒の自己理解を深めることができた。また、「自分発見ツール」と比較することができる「自立活動お助けツール」を作成し、指導者が活用することで、生徒の実態把握及び指導内容の検討に生かすことができた。これらのツールの活用は、実態把握や指導内容の検討を教員間で共有することにも効果的であった。以上のように、自立活動の指導の充実のために1人1台端末を活用して一定の成果を得ることができた。これらのツールは、柏市教育委員会指導課が運営するサイト「Kashiwa city GIGA School」に掲載する。

教育臨床

「ケース検討学習モデル」の提案

県立清水高等学校（前市川工業高等学校）教諭

あかお まい
赤尾 麻衣

県立槇の実特別支援学校教諭

いしい なつえ
石井 夏江

県教育庁東上総教育事務所指導主事（前県立長生特別支援学校教諭）

こやすゆ かり
子安裕佳里

長生村立一松小学校（前白子町立関小学校）教諭

さとう ようこ
佐藤 陽子

学校現場においてケース会議の認識は教員によって様々であり、ケース会議が有効に機能していない現状もみられる。そこで、ケースの捉え方やケース会議の流れを学ぶために、＜未整理事例＞を用いた「ケース検討学習モデル1」と＜架空事例＞を用いた「ケース検討学習モデル2」を作成した。参加者が会の流れや目的の確認による安心感を基盤とした上で、学習要素が可視化された分析シートの活用にも臨んだ結果、見立てや支援策を共有することができ、議論すべき点がより明確化されることがわかった。ケース会議をより質の高いものにするためには、「ケース検討学習モデル」を導入した校内研修を継続的に開催し、協議の仕方や子供を見る視点を洗練させていくことが必要である。

企業等派遣

ホテル業界とともに考え学ぶ、障害者雇用

県立千葉特別支援学校教諭

ふくしま けいた
福島 啓太

特別支援学校高等部で進路指導に携わる中で、障害者雇用の考え方を企業と学校で共に考える機会をもちたいと考えた。またホテルにおいて多様な業務を経験し、障害者雇用についての考えを社員の方々に聞くことで、実情を理解し、進路指導の一助にしたいと考えた。今回の研修先である「ホテルポートプラザちば」では障害者を雇用しており、実際に障害者雇用を行っている職場の方と多くの意見を交換することができた。そして、あいさつなど基本的なコミュニケーション能力に加え、自分を表現する力が必要であることが分かった。様々な就労先を志す生徒たちに自分自身が経験した事を授業の中で伝えることにより、生徒の進路選択に生かしていくことができると考えている。

研修（企業等派遣を除く）のより詳しい内容については、教育コンテンツ・データベース「Wakaba」で閲覧することができます。



千葉県総合教育センター

Chiba Prefecture General Education Center <https://www.ice.or.jp/nc/>

検索システムはごちにお進みいただくか、下のバナーをクリックしてください。
学習指導案・高等学校「私の授業レシピ」・長研生研究報告書等が検索できます。

Wakaba 学習指導案等検索

【検索システムについて】
「コンテンツ種別」「教科・領域」から必要なキーワードを押してクリックすると、検索ボックスに自動入力されます。それから「全文検索」をクリックしてください。

教育コンテンツ・データベース「Wakaba」



左ページへの
二次元コード

高等学校における情報活用能力の習得に関する生徒の意識調査

県立千葉西高等学校（前佐倉高等学校）教諭 きゅうとく 久徳 いくみ 郁美

1 はじめに

高校においてもBYODによる情報端末を活用した授業が始まり、思考力、判断力、表現力等を育成する授業にはどういったICT活用が効果的なのか研究したいと思い教職大学院へ進んだ。

ICTを活用し、習得した知識・技能を使いながら、情報を集め、自分の考えをまとめる学習活動が行えることが分かったが、生徒自身の「情報活用能力」の意識はどのように変化するのか調査をした。

2 研究の実際

公立高等学校第1学年2クラス（78名）を対象とし、情報端末を活用した授業が情報活用能力の習得に関する意識にどの程度影響を与えたかアンケート調査をした。

期間は2023年9月25日から11月16日の期間で週に2回、授業説明を含め全14回実施した。

基本的な授業の流れは、まず教師が講義を行う前に、課題を学習プラットフォーム上で提示し、個人またはペア・グループでPowerPointなどプレゼンテーション機能に意見を記入する。つぎに話し合う時間を設けて意見を練り上げる。その成果物をもとに生徒が発表したり、教師が補足を行ったりする。

生徒自身または生徒間で意見を考える場面や、活動を行う上での気づきを共有する場面を意識した。

3 研究の結果

生徒が自身の活動に照らし合わせて回答できるように質問項目を33項目設定し、4件法

（十分行える、行えると思う、自信がない、わからない）で尋ねた。調査の結果、肯定的な回答が10%以上増加したのは9項目であった。

そのうち上位5項目を増加率が高い順に載せる（以下表）。

表 肯定的な回答が増加した上位5項目（%）

	事前	事後
(1)スプレッドシート上に集めた情報の整理の仕方 や作成するグラフの種類を変えることによって、 様々な視点から情報を捉え、傾向や変化につい て考える。	42.9	→ 70.9
(2)スプレッドシート上に記載した情報を様々な基 準に基づいて、並べ替えたりグラフ化したりし て整理し、分析する。	42.9	→ 63.3
(3)必要に応じてマイドライブや共有ドライブに ファイルを格納したり、友だちとファイルを共 有して学習に活用したりする。	71.4	→ 91.1
(4)スライド上に用意されたフローチャートや自分 で作成したフローチャートを使い、自分の考え や問題解決のための手順を表現する。	44.2	→ 60.8
(5)スプレッドシートを使い、意見を交換したり、 振り返りをしたりする。	72.7	→ 89.9

4 研究の成果と今後に向けて

(1)成果

短期的な活用でも生徒は定期的な端末の活用を通して情報を整理したり、分析したりする意識は高まることが分かった。また、高校の発達段階では様々なアプリケーションの活用を短期間で習得し、さまざまな言語活動を行える可能性があることが分かった。

(2)今後に向けて

日常づかいをしていった先に、生徒の意識だけでなく、実質的な能力に結びつけることが必要である。近年、デジタルツールの進化はめざましく、将来生徒たちは想像もできないような技術を用いて課題解決を行っていく必要がある。教師も新たな学習方法を学び続ける必要がある。